

断りを入れても短所は隠せない — 逆接表現が人物の具体的特徴の好ましさ に及ぼす影響 —

井関龍太・菊地 正
筑波大学人間総合科学研究科

研究の背景

○人は文を読むときにすべての情報に等しく注意を向けているわけではない

主語, 固有名詞, 最初に言及された対象に注目しやすい=焦点化

(e.g., Sanford & Garrod, 1998)

⇒焦点は文全体の印象にどのような影響を及ぼすのか?



----- 井関・菊地 (2007) -----

○逆接表現を用いた文によって談話焦点を操作し, 文の記述する人物の印象評定を求めた

○56の文材料を作成:

a) 逆接の場合: "Aは[特性語1]だが, [特性語2]だ。"

b) 順接の場合: "Aは[特性語1]で, [特性語2]だ。"

- ・Aの部分には, 男女いずれかの名前 ("和也""優子"など)
- ・特性語には, ポジティブ語, ネガティブ語, 中立語を使用

<使用した文材料の例>

【ポジティブ語】

先行-逆接: 和也はがまん強いが, 欲がない。

先行-順接: 和也はがまん強く, 欲がない。

後続-逆接: 和也は欲がないが, がまん強い。

後続-順接: 和也は欲がなく, がまん強い。

【ネガティブ語】

先行-逆接: 和也は知ったかぶりをするが, 欲がない。

先行-順接: 和也は知ったかぶりをし, 欲がない。

後続-逆接: 和也は欲がないが, 知ったかぶりをする。

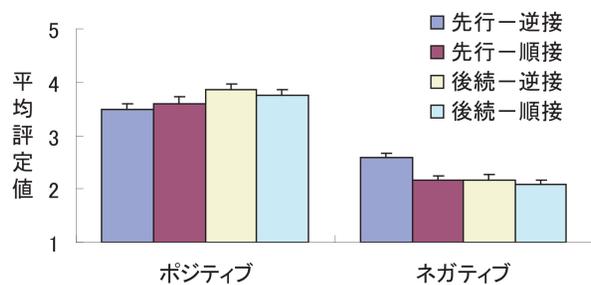
後続-順接: 和也は欲がなく, 知ったかぶりをする。

※ここでは, 中立でない特性語をオレンジ色で示した

・実験参加者: 24名の大学生 (女性17名)

・要因計画: 2 (特性語: ポジティブ語・ネガティブ語) × 2 (接続法: 逆接・順接) × 2 (特性語の位置: 先行・後続) の被験者内計画

・手続き: 各文を読んで, 文の述べる登場人物がどのくらい好ましいと感じるか5段階で評価を求めた (1=まったく好ましくない~5=とてもこのましい)



○3要因の交互作用 ($F(1, 23) = 9.87, p < .01$)

- ・ポジティブ語: 特性語の位置の主効果のみ
- ・ネガティブ語: 接続法 × 特性語の位置の交互作用

a) 先行-逆接 > 先行-順接

b) 先行-逆接 > 後続-逆接

→逆接表現により, 印象評価が向上

○ネガティブ語の場合には, 逆接表現によって人物の評価が変化した

⇒この変化の原因:

- ・焦点情報 (中立特性) の評価が相対的に上がった?
- ・非焦点情報 (ネガティブ特性) の評価が上がった?

⇒単に焦点情報だけが作用したのなら, ネガティブ語では, 後続-逆接条件の評価が最低になったはず

----- 本研究の目的 -----

○非焦点情報の状態について検討

・文全体の評価に直接的に寄与しているのか (加減算的な影響を及ぼしているのか)

○非焦点情報に相当する特性について特定の評価を求める

a) 非焦点情報の評価が変化しているとするば……

・ポジティブ語: あまりポジティブでなくなる (評価DOWN)

・ネガティブ語: あまりネガティブでなくなる (評価UP)

b) 非焦点情報の評価自体は変化しないとするば……

どちらの特性語にも焦点の効果は見られない

実験

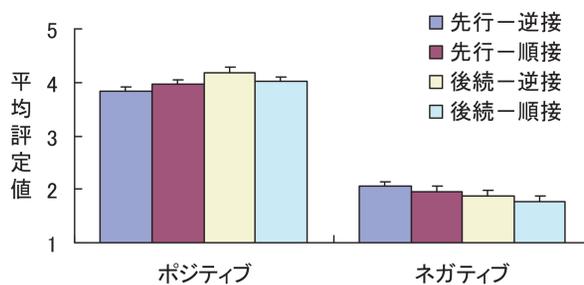
具体的な特性に対する好ましさの評価

○文の中の特定の要素に注目して評価する

・実験参加者: 24名の大学生及び大学院生 (女性15名)

・要因計画: 実験1と同じ

・手続き: 各文を読んで, 具体的な特性についての評価を求めるため, "Aが[特性語]であることをどのくらい好ましく思いますか?"と尋ね, 5段階で評価を求めた (1=まったく好ましくない~5=とてもこのましい)



○3要因の交互作用 ($F(1, 23) = 1.85, p = .19$)

・ポジティブ語: 接続法 × 特性語の位置の交互作用

a) 先行-逆接 = 先行-順接

b) 先行-逆接 < 後続-逆接

→焦点の効果は明瞭でない (位置の効果のみの可能性)

・ネガティブ語: 特性語の位置の主効果のみ

考察

○評価を求める対象によって, 焦点の効果を変化した

井関・菊地 (2007): ネガティブ語で焦点の効果

・逆接表現によって, ネガティブな特性がより好評価に

・特性語が単純に無視されるのではない; 非焦点語を無視する方略によるなら「後続-逆接 < 後続-順接」となるはず

本研究: 明確な焦点の効果なし

・ネガティブな特性の評価は向上しなかった

→非焦点情報それ自体の評価は変化しない?

○非焦点情報はどのような状態にあるか?

・無視されてはいない (井関・菊地, 2007)

・評価は変化していない (本研究)

→焦点情報と併せて, 文全体で評価したときのみ効果あり:

a) 焦点情報と非焦点情報のコントラストから, 評価の違いが生じる (個別要素でなく, 文全体の観点から焦点化を捉える必要性)

b) 焦点情報と非焦点情報のコントラストのために, 中立語の評価が非焦点情報の価とは逆の方向に変化する